日文教育資料［図画工作・美術］

他業種から学校現場へ ～若手教師サミット～

まなびと+ Plus

vol.2

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ！ 日文 検索

撮影：福田龍郎

若手美術教師が語る過去・現在・未来

今回は，次世代の美術教育を支える東京都の若手教師による座談会です。集まった4名の先生方はいずれも，別の職業を経験していたり，大学で研究を重ねたりと様々な経験をお持ちの方々です。彼らの目から見た今の美術教育の現場，未来の美術教育に願うことなどを自由に語ってもらいます。

福田龍郎先生
（杉並区立中瀬中学校）元カメラマン

多摩美術大学大学院絵画専攻修了。学生時代から絵画工作教室の講師のアルバイトをしており，子どもたちと関わり図工や美術を教える面白さに触れる。その後ドイツへ渡り，ベルリン芸術大学で写真を学び，卒業。ドイツ・日本でカメラマンとして活躍したあとに現職。カメラマン時代は多忙を極めたが，大きな仕事が終わった時に，美術を教える楽しさや大切さをふと思い出し，講師の登録をしたのが転身のきっかけ。写真は勤めなくてもひとりで出来るが教師は違うと，最終的に教職を選んだ。

スイス アルプスにて（2006 年撮影）

奥井伸先生
（墨田区立桜堤中学校）元アニメ美術監督

京都精華大デザイン学部マンガ学科卒。数年間の放浪生活を経てアニメの背景画制作会社へ入社。以降約 10 年間アニメ業界で働く。美術監督として，若いスタッフを育てる立場になった時「好きなことをやっているのに意識が低いのでは？これはマズイよな，世間一般に…」と感じ，大学時代に行った教育実習を思い出して，社会人枠で教員の世界へ。

「前職が自分の能力に合った適職だとしたら，教師は天職。毎日充実しているんです」と教員生活を楽しんでいる。

想い出の教室（2012 制作）

座談会出席者

岩崎恵先生
（大田区立馬込東中学校）元キャラクタープランナー

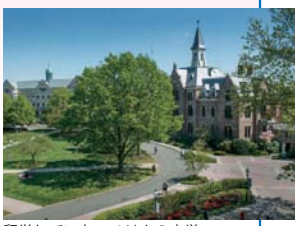
女子美術大学を卒業後，ニューヨークへ留学。その後，広告会社の営業職，キャラクターデザインの企画・デザインなどの仕事を経験。そこで，モノづくりや企画立案に関するスキルを身につける。

約６年務めた頃に，もともと「教育に関わっていきたい」という気持ちがあったこともあり，モノをつくることよりも人を育てるという方向に興味が向き現職に。今でも美術はモノをつくることよりも人を育てるためのツール・窓口として捉えている。

前職で手掛けた商品

櫻井妃呂子先生
（八王子市立松が谷中学校）哲学博士課程中退

金沢美術工芸大学の芸術学専攻卒業後，アメリカのニュージャージー州の大学，神戸大学へ進学。様々な方面に興味・関心を広げる性格で，各大学で美学，哲学，フェミニズムなどを研究。家庭の都合で大学を休学した際に通信教育で教員免許を取得することにし，その時に行った教育実習で教える楽しさに目覚め教員の世界へ入る。毎回の授業の中で生徒の反応が見え，その作品の中で生徒が見えてくることに魅力を感じている。



留学していたアメリカの大学 Seton Hall University

作品は、その生徒の顔みたいなもの（櫻井）

中学校の美術の授業は芸術家を育てるためではない（岩崎）

学校という現場・美術教師という職業

――皆さんは，それぞれ教育現場以外で活躍された後，教師になった方ばかりです。前職との違いを感じる部分はございますか。

福田：教員は人との関わりがダイレクトですね。同じ空間や時間の中で一緒に始め一緒に作業していく，その関係性が見えながら，しかもモノができてくるというのは，すごく特別な空間だと思いました。

奥井：目の前にいるのは人間なので，声掛けひとつによっていかようにも動いてくれるというのが嬉しいですよね。そういう時に転職して本当に良かったなと思います。

櫻井：生徒と関わるから見えてくるというか，新しい視点が開けてくるわけですよね。自分でも思いもかけなかったものが，生徒からバッと出てきたりするじゃないですか。それが面白いです。

岩崎：逆説的ですが，教える時こそ本当に学ぶというか。

福田：自分のことを見ている子どもの目ってなかなかないですよね，他の職業では。聞こうとしてくれている子どもの目。それが最初の現場で強く印象に残っています。

岩崎：あるベテランの先生から「今から育ってくる生徒たちが次の時代，世の中を動かして，その時代にあなたの子どもが生きていくんだよ。怖くない？」って言われて「確かに」と（思った）。だから私自身が関われる生徒は少ないけど，丁寧に育てていくというのは，やはり責任があるんだと感じました。「自分の子どもを委ねる人たちを育てていくんだよ」と言われて「なるほどな」と思いましたね。

福田：教員になってみてこういった部分はたくさんありますね。でもそうでない部分もありますよね…例えば，授業以外の校務が多いのはビックリしました。

岩崎：「このタイミングでこの生徒と話さなきゃ」って思っていても，自分の体が空かないことありますよね。「このクラスの状況だったら今話をしたい！学活を持ちたい！」と思ってもできないことがあります。あと，どんどん５教科だけ重要化されて，時数が増えていって。その分，実技教科の時間は減らされてきています。でも実技教科こそ学校で経験できるものではないですか？「本当はこっちこそが生活力を育てているんだ」ってすごく思います。それはギャップというかジレンマですね。

櫻井：よく生徒に言われないですか「美術って必要？」って。「美術なんて役に立たないじゃん！」なんて言ってくる子もいますよね。

奥井：美術の授業が嫌いなんだろうね，そう聞いてくる生徒は。でもできないなりにも作ったり描いたりさせて「苦手だけど嫌いではない」という意識にさせないと，（美術教師が）いる意味がないと思う。

福田：苦手な生徒も美術との関係を全部断ち切っているということはあまりないと思うんです。例えば鑑賞でビデオを食い入るように見る生徒とか，画集をずっと見ている生徒とか。どの生徒にもそういうところがあるっていうのを心に留めておくことが必要と思っています。だから美術が役立つかどうかを即答するよりは，別なことを一緒になって考えた

いです。

櫻井：正直，作品を見るとどういった生徒かっていうのは一目瞭然です。

福田：むしろ負の問題を見つけやすい。

奥井：僕はいつも最初の授業でバレーボールを描かせるんですが，それをスクールカウンセラーに持って行って「この生徒はこんな感じなんです」と説明すると，だいたい問題を共通認識できます。

福田：他の生徒作品と並べてみせると他の先生方も「あ，これはまずい」って視覚的にわかるんですよね。

岩崎：私もこの前，ある生徒が問題を抱えているのはわかっていたんですが，それが作品に如実に表れていて。かなり生徒理解につながるから興味深いと思いますね。美術で良かったなと思うのはそこです。

櫻井：それと作品を見ることによって生徒の顔を覚えやすくなる気がする。絵がその子の顔みたいなものだから。

奥井：名前が書かれていなくても返却できます！

福田：できますね！一瞬で視覚的に生徒を理解できるのが美術科のすごいところかな。もちろん国語とか他の表現をする教科もあると思うんですけど，美術は作品に含まれている要素がより多いので，いろいろな読み取り方ができます。

視覚的に生徒を理解できるのが美術科のすごいところ（福田）

美術教育の未来に願うこと

――今後の抱負や未来への展望について，お聞かせください。

岩崎：私たちがよく言うのは「芸術家を育てるための授業ではない」ということですよね。

櫻井：生徒が良い作品をつくるのはもちろん嬉しいですけど，そこを目標に置いてしまうとちょっとずれてしまう気がします。

福田：そういう意味では，中学校は美術に関わる最後の機会になるかもしれない生徒たちを見ている，ということになりますね。それが中学教師の気概にもつながるかな。その子たちの美術に対する気持ちを決めてしまうという重みがあります。

櫻井：世界は常に美術で溢れているわけですから，関わりつづけることは普通にしていてもできるとは思うんです。でも，中学校の美術の授業はおそらくほとんどの生徒にとって「作る」という形で美術に関わる最後の機会になると思います。最後の機会だったら最後の機会なりに楽しんでもらえるといいなと考えています。

岩崎：私は美術を大事にしてほしいという思いで，１年間の最初の授業の時に授業方針を伝えます。その時に「年間で35時間しかないんだよ」って言います。つまり１年間で一日半しかないんだよって話をすると，いかに貴重な時間なのかっていうのを考えてくれます。

「中学時代に学んだことって大きかったな」って思ってもらえるように，そういうのを大事にしてくれて「やっぱり自分の基盤を作ったのはあの時代だな」というふうになってくれていたら，すごく嬉しいですね。

櫻井：どんな生徒でも「なんだかできて嬉しかった」っていう気持ちを持てる授業ができるといいかな。楽しんでもらいたい。楽しめるってい

美術が嫌いな生徒を「苦手だけど嫌いではない」という意識にさせないと（奥井）

うのは，ある程度「できる」っていうことも重要だと思うけど「できた」っていう小さい喜びとか自信というものを持てる授業がつくっていければなって思います。

奥井：自分はやっぱり授業時間数をなんとかしたい。そういう環境を作る側に入りたいと考えるときもある。現場でやるのも楽しいけれど，頑張る先生のための環境づくりもしたい。「これ以上時間を減らさないでくれよ」という気持ちがありますね。

福田：美術に関わることって，やろうと思えば将来いくらでも接点があります。我々は美術教師なので，そういうのを伝えるのがひとつの仕事じゃないかと思うんです。これだけ世の中に色や形やいろいろな美術的なものが溢れているわけで，それに親しむっていう気持ちは，本来誰でも持っているものです。それを中学校にいる間に再確認して，今後につながるものとして卒業していってほしいと強く願っています。

奥井：身近な具体例として生徒に伝えるのですが，自分が年取って子どもが生まれて「お母さんが買ってくる服ってセンスない」とか。逆に，「○○くんのお父さんの撮ってるホームビデオっていつもかっこいい」とか，そういうのにつながればいいなって思います。

櫻井：ちょっとした知識があればけっこう変わりますからね（笑）。

岩崎：お金じゃなくて，そういう生活の豊かさ（笑）。

櫻井：確かになくても普通に暮らしていけるんだけど，その楽しさがあるのとないのとでは，モノクロとカラーくらいの違いがあるんじゃないですか。

実践紹介 学校美術館（岩崎恵先生／大田区立馬込東中学校）

岩崎先生が継続的に行っている「学校美術館」は，校内の壁をキャンバスにして絵を描くというダイナミックな実践。１年目は海底，２年目は地上・動植物がテーマ。３年目となる今回は，美術部とボランティアの生徒たちが“宇宙”をテーマに制作を行った（2013 年 7 月 25 日実施）。

まなびと+Plus vol.2

日文教育資料［図画工作・美術］

平成25年（2013 年）11月15 日発行

編集・発行人　佐々木秀樹

発行所　日本文教出版株式会社
大阪本社　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33213

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171

東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618

九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938

東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690